

中学2年生になった4月、担任の先生が、
「近々、子どもが生まれる予定で、生まれてから20日間育児休暇をとります。」
と話されました。

その時、僕は、「子どもが生まれるんや。おめでたいな。」と思っただけでした。その後、学年通信には、「先生の子どもが生まれたこと」や「約3週間の育児休暇をとること」や「他の先生も応援していること」などが書かれていました。僕は、なんとなくじわじわと違和感を覚えました。家族とその学年通信を見ながら、母が「男の人が育児休暇をとることは珍しいからね。」と言いました。

母の話によると、僕が生まれた13年前、母は僕が1歳になるまで育児休暇をとったそうですが、父はもちろんとってなかったし、考えもしなかったそうです。当時、父親が育児休暇をとることはほとんどなかったそうです。それから13年たった今も、やはりそれは珍しいことで僕が感じた違和感はそのに関係しているのかなと思いました。僕は、男性の先生が育児休暇をとると聞いても、「そうなんだ。」としか思いませんでした。父親が育児休暇をとるのがまだまだ当たり前ではないということを感じました。

生まれてくる子どもは、父親と母親の子どもなのに、どうして日本の父親は育児休暇をとりにくいのか、父親も育児休暇をとれる制度があるのに、どうして浸透しないのか、僕は、「子育ては母親がするもの」という、日本古来の考え方が、まだまだ根強いのではないかと思います。僕の祖父は子どものオムツを替えたことがなかったと話していたし、父親はおむつを替えてくれたものの、やはり育児のほとんどは母親だったそうです。

僕が思うに、子どもと触れ合っている時間は、父親より母親の方が多くのではないかと思います。母は当時をふりかえりながら、

「子どもが一番成長する時の表情や仕草などの思い出が、私の方が多く見ることができ、うらやましいですよ。」
と言っていました。

遠い将来、僕に子どもができたら、僕は生まれてくる時も立ち会いたいし、オムツも替えたいし、泣いたらあやしてあげたいし、いろいろなことをしてあげたいです。それは、母親の育児を助けるためということよりも、僕自身が、我が子のためにそうしたいと思うからです。育児休暇の制度があれば、使いたいと思うし、それが家族の幸せだと思います。

2020年、男性の育児休暇取得率は、12.7%と過去最高だったそうですが、政府目標の13%には及ばず、また、休暇期間も5日未満が全体の約3割とのことでした。男性の育児休暇に対する理解度は少しずつ上昇しているとはいえ、まだまだ少ないと感じます。育児は父親と母親が共同かつ対等に行うものという考え方が、もっともっと多くの世代に広がれば、男性の育児休暇取得率が上がるのだろうし、それが当たり前の社会になっていくべきだと、僕は思います。

僕の担任の先生が、この日本社会で、父親として育児休暇をとったことは、もしかしたら、とても勇気が必要だったことかもしれません。実際、先生が育児休暇をとるとき、「少し勇気が必要だった」と話しておられました。先生の考えとして、男の人は、家のことをしなくてもよいという考え方は違うとっていて、仕事とは違ったやりがいを感じたそうです。新しい発見としては、母親の偉大さや、当たり前のことを毎日繰り返す大変さを実感したそうです。そこで、「これまで以上に育児や家事をしていきたい」と話していました。

僕は、そんな先生を素敵だなと思うし、僕が思う、当たり前の社会への階段を一步上ってくれたと思います。僕もその一步に続いていけたらと思うし、男の人は子育てをしなくてもいいのではなく、男の人も女の人も、協力して子育てをするという考えを、もっとたくさんの人に伝えていきたいです。